

長野県社会福祉士会 NEWS

第182号
2021/1/1



発行▶公益社団法人長野県社会福祉士会
会長 萱津 公子
事務局▶〒380-0836長野市南県町685-2
長野県食糧会館6F
編集▶広報編集委員会
発行部数▶2,400部

TEL▶026-266-0294 FAX▶026-266-0339 E-mail▶info@nacsww.jp HP▶https://nacsww.jp/

災害福祉支援における社会福祉士の役割	1
災害支援における社会福祉士の役割を考える	2~3
新型コロナウイルス感染症対策と地区活動、学習会の状況について	3

contents

長野県社会福祉士会 中期ビジョン「笑顔をつなぐ」への取り組み	4~5
特集「年男・年女 今年の抱負」	6~7
リレーエッセイ、信州ぐるっと!!、編集後記	8

災害福祉支援における社会福祉士の役割

山崎 博之 (災害福祉支援運営委員会委員長)

「住み慣れた土地で芋や野菜を作って生涯を全うするはずだった」「できることなら災害が起きる前の日に戻してほしい」令和元年東日本台風災害から1年が経過した地域から聞こえてきた声です。

災害はこれまでの生活や見慣れた地域の景色を一変させ、地域全体を一瞬で絶望に包み込んでしまいます。そのため、医療・保健と連携した福祉の専門職支援や、被災地に駆けつけたボランティアと被災者をつなぐコーディネーションなど、被災者の命を守り、生活や暮らしを支える災害福祉支援の重要性が高まっています。

本会における災害福祉支援の検討は、平成29年度からプロジェクトによりスタートし、これまで議論や学習を重ねてきました。平成31年2月に官民共同による長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会(災福ネット)が設立され、本会会員も長野県ふくしチーム(以下、「ふくしチーム」)へ登録するなど、災害福祉支援の仕組みや体制整備に取り組んできました。

令和元年東日本台風災害では、ふくしチームが初めて公式派遣され本会会員も多数参加しました。ふくしチームは長野市内の避難所にて医療・保健の支援者と一緒に日々のラウンドアセスメントや、「なんでも相談」窓口を設置して避難者に寄り添い、傾聴を重ねながら生活課題や福祉課題の把握に努めてきました。特に本会会員は、目の前に噴出した課題だけではなく、その背景にある根本的な課題を把握するため、専門性が異なるチーム員を牽引するとともに、これからの生活の場である「地域」に視点を向けながら総合的な支援を

展開するジェネラリストの重要性を示してきました。

また、災害ボランティアセンターの運営支援に携わった会員も多く、ボランティア活動を通じて被災者の生活の基盤である自宅を直接訪問(アウトリーチ)することができ、被災者のこれまでの暮らしぶりや歩んできた人生、さらには地域との関係性をアセスメントすることができました。このことは、被災からの立ち直りに寄り添うことであり、復興に向かう過程を、家族や地域とともに専門職として支える礎になりました。ボランティアの活躍により絶望的であった地域の景色を変えていったことは、被災者の希望とともに、地域からも信頼を得ることとなり、住民自らがボランティアコーディネーションの実施へとつながりました。この動きは復興期における住民主体の地域活動の再興や新たなまちづくりの展開の原動力となっています。

最後に、災害とは特別なものではなく誰しものが当事者になる可能性を持っています。今年度、日本社会福祉士会が開催した都道府県社会福祉士会災害担当者会議においても、関心のある会員だけが災害福祉支援の研修を重ねるだけではなく、全体の取組としていくために基礎研修の科目に取り入れたらどうかという意見も挙がりました。本会では、令和元年度より災害福祉支援プロジェクトは委員会となった。会員一人ひとりに災害福祉支援の関心が広がり、ふくしチーム員の増加や被災地におけるソーシャルワーク機能の強化につながるよう、学習や啓発の機会を継続的に実施していきます。

災害支援における社会福祉士の役割を考える

～令和元年東日本台風災害の支援実践から～

県内各地に多くの被害をもたらした令和元年東日本台風災害から1年が経過しました。災害福祉支援運営委員会では、被災地における相談支援と生活支援の取組を振り返り、社会福祉士の更なる役割と機能について学習するためのオンライン学習会を、多くの方に参加いただくため、同内容で2回開催しました。

日時：①令和2年12月2日(水) 18:30～20:30 ②12月5日(土) 13:30～15:30

【講義・演習】

「災害支援における社会福祉士の役割を考える」

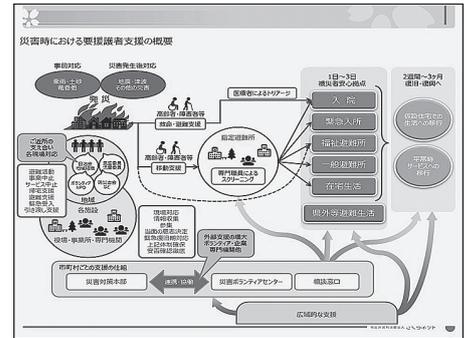
～相談支援・参加支援・地域づくりの充実に向けて～

講師：石井 布紀子氏（NPO法人さくらネット代表理事）

私は26年前に発生した阪神淡路大震災以降、災害被災地に出向き、要配慮者支援の充実において関係者の皆さんとともに歩んできました。その中で、「災害現場に福祉の力を」「生活支援や相談支援の充実を」という切なる願いを持つようになっていきました。被災現場は縦割りの弊害が生じやすく、協働による課題解決が不可欠です。災害救助法・災害対策基本法の運用が優先され、被災者の発災前後をつなぐ支援は行われにくいのです。また平時からグレーゾーンであった方の課題が見える化し、長期化するため、災害支援の枠組みだけでは対応しづらくなっています。

今後、さまざまな被災者や地域へのよりよい支援を基盤としたコーディネート機能を構築しながら、民間主導で新たな仕組みを創る必要があると考えています。そのような中、昨年度の長野県内での取り組みは先進的かつ包括であり、災害支援における福祉専門職の役割・社会福祉士ならではの支援の可能性を切り拓く成果があったと感じています。

社会福祉士の皆さんには、総合的・包括的な支援を模索していただきたいと願います。また「伴走型の支援」「つなぎ支援」を展開し、将来の生活再建を見据えたアセスメント手法および協働コーディネートのノウハウ構築をお願いできないかと思います。そのような視点から、今回の研修における実践報告は、私にとって希望の光であったと敬服いたします。



【実践報告】

「令和元年東日本台風災害の支援活動」

報告者：北原 由紀

(災害福祉支援運営委員会副委員長)

長野県ふくしチーム員として長野市内の避難所にて活動しました。傾聴していくことで被災者との距離が近づき、「困ったことがあったら黄色のチョッキ（ふくしチーム員ビブス）の人に言えばいいよ」と信頼関係を構築しながら生活課題や福祉課題を把握し、チームで役割分担し、課題を整理して各専門機関につないでいきました。社会福祉士（ジェネラリスト）としての総合的な視点と、「避難所生活」の現状だけでなく、これからの「地域生活」をイメージし、日常的に被災地でも実践することの大切さが報告されました。

報告者：小野 貴規（長野市社会福祉協議会）

災害直後、長野市社会福祉協議会の職員として、被災した地域に設置された災害ボランティアセンターのサテライトを担当しました。特に堤防が決壊した長野市長沼地区の津野サテライトでは、地域全体が甚大な被害であったため1軒1軒被災者宅を回りながら「断らない相談支援」を展開しました。アウトリーチの徹底により、地域との関わりの孤立が支援からの孤立につながることが見えてくると、本会会員のネットワークをフル活用して、顔見知りの保健師や地域包括支援センター、障がい者相談支援専門員につないでいきました。

また、800を超える世帯が自宅を離れて避難生活が余儀なくされたため、令和元年12月から被災者見守り・相談支援事業として「長野市生活支援・地域ささえあいセンター」を担当しています。「寄り添う」ことによる安心感、「話せる」ことによる安心感、「つながる」ことによる安心感を大切に被災者一人ひとりに継続的に寄り添った伴走支援の取組が報告されました。

社会福祉士としての視点

- ◎災害時は平時の課題がより顕在化するとともに、より潜在化する。専門職として何が「気になる」か。
- ◎本人の主体性を尊重し、被災に伴う感情、思い等に寄り添いながら、専門職の視点で本人及び世帯をアセスメント。
- ◎本人を取り巻く環境、地域と、その関係性をアセスメント。
- ◎災害時の地域資源を、本人への関わり方を含めて把握。
- ◎フェーズによる切れ目のない支援ネットワークを構築。
- ◎アウトリーチによる生活場所での生活状況の把握。
- ◎中長期的な生活の見通しと課題を把握し、支援計画を立てる。
- ◎本人の課題を整理し、時に本人に代わってアドボカシーを働き、行政、機関等に働きかけ、連携・協働して支援を図る。
- ◎被災地域のコミュニティづくり支援。

支援の心構え

12

- ▶ 主役は「地元」、外部支援者は「地元」をサポートする→支援者・行政職員も被災者→自分のことは「置いて」仕事をしている人たち
- ▶ 被災した地域、各避難所のお作法を知って対応する
- ▶ ラウンドは最新情報と共に→知らないことは避けない
- ▶ 今日、少ない情報で活動し明日に引き継ぐ
- ▶ いつもの専門分野は「置いて」今、避難所で起きていることに対応する→子ども・障がい・高齢・困窮など
- ▶ 避難住民のストレス発見→「自立」「自律」支援
- ▶ 喪失体験・受容のプロセスの理解→ひたすら「傾聴」し再生へのエネルギーを蓄えるお手伝い
- ▶ 避難所生活→地域生活への移行
- ▶ 「私たちは引いていく人」を自覚する→私が抜けても継続できる支援・たんたんさん...

災害支援学習会に参加して

佐藤 尚治 (広報編集委員会副委員長)

長野県における災害支援の経験を活かし、知見を重ねた経験者の報告から聞き、社会福祉士の役割を示唆的ポイントとしてとらえながら学習会に参加しました。

各報告から考える社会福祉士の役割として共通するのはジェネラリストであること、総合的包括的な援助展開を前提にして、協働のコーディネートするノウハウを持つこと、少しの可能性も見逃さないアセスメントや、つなぐことの支援も視野に入れつつ、専門家として伴走型の代弁的機能を発揮するなどです。このことは社会福祉士としてはごく普段に行われている日常的な支援です。日常的というのは決して軽視している言い方ではなく、社会福祉士としての意識が、常にそこに向いていることが多いといった意味です。

ただ災害という特殊性で、さらに混乱をきたしている被災者と現場を目の当たりにした時に、その判断ができるかどうかという点です。平時に発災を想定した手順やアセスメント、連携方法、配慮する点などが準備できるか、環境が整えられるかどうかといった所です。そういった意味では、支援の質の高さと経験者の多くの言葉が刺さったといえる学習会でした。

「どこの災害現場でも災害支援として全力で入るが、被災者への支援はどうしても足りない。」災害支援が誰に対するものであるのか、災害支援の在り方として考えるきっかけとなり、また振り返る言葉でもありました。この学習会では、とても大切な価値をいただけたことに感謝します。

新型コロナウイルス感染症対策と地区活動、学習会の状況について

『コロナ禍における地区活動の現状』

～社会福祉士としてどう動く？～

小川 明子 (理事・南信地区支部長)

新型コロナウイルスが猛威を振るい、3月下旬以降は対面での打ち合わせや、学習会の開催が困難になり、理事会で「オンラインを取り入れた活動推進」という方針が示されるまで、地区活動は停止の状態が続いていました。7月にオンラインで役員会を開催するも…支部長がOA機器に弱く、副支部長さんに「おんぶにだっこ」で始まり、学習会の再開もなかなか至りませんでした。9月からは「南信地区全体・毎月の開催で取り戻そう！」と各副支部長さんを中心に、役員の皆さんが頑張ってくれています。

南信地区では「南信州／上伊那／諏訪」のそれぞれで、学習会活動を推進していたので「南信地区全体」に馴染みがなく手探りですが、オンライン開催をきっかけに顔を知らなかった南信地区の会員同士が知り合うきっかけになり、11月の学習会では他地区の会員にも多くのご参加をいただきました。今後も一斉メールやホームページへの掲載で情報発信しますので、ぜひご参加ください。

先に示された「中期ビジョン」で示されている活動方針や、具体的な取り組みの中でも地区活動は、社会福祉士としての自己実現や、それに基づく自信と信頼を育てていく上で重要であり、学習会で大切にしてきた「顔の見えるネットワークづくり」が裏付ける面もあると思います。withコロナの時代に「いかに“つながり”を維持していくか」は、社会福祉士として、ソーシャルワークに携わる者として、真剣に考えるべき課題でもあります。広い視野と高いアンテナを持った社会福祉士を目指し、今後も学習会活動に注力していきます。



地域で支えるシステムを、社会福祉士会のネットワークで、より多様化したものに

掛川 敦（地域生活定着支援センター運営委員）

地域生活定着支援センターの運営委員となって2年目の私が、委員会の取り組みについて申しあげるのは大変おこがましいのですが、携わるようになってから知ったこと、感じたこと、所属施設の取り組みについてお伝えしたいと思います。

1. 今年度の地域生活定着支援センター運営委員会の取り組み

○運営状況の確認と助言などのサポートを行うため、2～3カ月に1回程度開催され、

- ・地域生活定着支援センター及び再犯防止推進ネットワーク事業の進捗状況の確認
- ・支援対象者の現状と取り組み状況の報告（事例検討）などを行っています。

2. 新型コロナウイルス感染症対策について

運営委員会では第2回から、また、地域生活定着支援センターの協議会や研修会においてもオンラインで開催され、コロナ禍においても継続して開催していくことの意義は大きいと感じています。

3. 中期ビジョンの4つの価値にあわせての今後の委員会の取り組み

委員会において毎回必ず、センター職員より現在の支援対象から、数例の事例検討が行われます。対象者の障がい程度や家庭環境からの、犯罪概要や動機、今後の支援体制、それに対する問題や課題があげられます。そこで感じるのが、多種多様な分野・事業所で業務している社会福祉士だからこそこのネットワークで、より柔軟で迅速な「連携と協働」の支援体制の構築が図れるのではないかということです。所属機関・施設のサービスはもちろん、日頃の業務から知り得た「地域の社会資源」の活用方法が情報共有できれば、センター職員の支援の幅が広がってくると思います。

所属施設においては昨年12月、市町村のご理解をいただき、「自立準備ホーム」を開設し、受け入れを始めました。今後も支援機関の一つとして、協力していければと思っています。

4. 長野県社会福祉士会、委員会のあるべき姿について

まず、矯正施設には高齢や障がいのため福祉の支援が必要にも関わらず、適切な福祉支援に繋がらないために、犯罪を繰り返してしまう人がたくさんいることを、研修会などを通じて伝え続けていくこと、それによって、矯正施設出所者に対する根強い偏見や受け入れに対する不安を、会員一人ひとりから、所属機関・施設から払しょくしていくことが必要だと感じています。これが一番難しいことも十分わかっていますが、「社会福祉士としての価値と役割を自負」することで、まず自分から、そして所属する機関・施設から変えていければ、地域社会も変わっていくのではないのでしょうか。

5. 社会福祉士としての思いや会への提言

「長野県社会福祉士会として存在意義・価値」として社会に認知してもらうには、社会福祉士（会）としての活動内容はもちろん、組織率を上げる必要もあるかと思います。会と会員個々がともに有益となるよう、将来的には業務独占を勝ち取ることができるよう、私も加入率向上への行動を起こしていければと思います。偉そうなことを言っていますが、「どこから何をしていたらいいのかわからない」が今の正直な気持ちです。

中期ビジョン「笑顔をつなぐ」への取り組み

『新型コロナに負けない！ ひとりひとりをつなぐ広報編集委員会の役割について』

中野 純・藤森 洋子・松川 美由樹（広報編集委員）

1. 今年度の広報編集委員会の取り組み

委員会としては年間6回の広報紙発行と事務局管理によるホームページの運用・会員への一斉メールによる情報発信を行っています。各地区から選出された委員が、会員へ寄稿依頼などを行い、理事・事務局と協力・連携して編集しています。広報紙は特集ページや特色ある活動を発信するコーナーの他、定時総会やシンポジウム・研修会・各種委員会などの活動を広報しています。社会福祉士としての専門性を大切にし、社会福祉に関する知識・技術の県民への普及・啓発を行ってきました。今年度はコロナ禍で集まらない形での会議・研修が中心となっています。委員会の紹介や会員からの寄稿を通じて、社会福祉士の活動や現場の実態が分かるように広報紙の編集を心がけています。

2. 新型コロナウイルス感染対策について

広報編集委員会は、メールやLINE・電話など非接触のやりとりを基本とし、意見交換・寄稿依頼・編集校正などの作業を行ってきました。広報編集委員会メンバーの顔合わせの場や取材活動の場（研修会などのイベント）がweb開催になっていることに戸惑いや取材編集のやりづらさもありますが、新たなネットワーク構築や取材意欲へのエネルギーに昇華させる機会としていきたいです。またコロナ禍の本会の取り組みをしっかりと伝えていけるようにしてまいります。

3. 中期ビジョンの4つの価値にあわせての今後の委員会の取り組み

中期ビジョンの4つの価値（自己実現・自信と信頼・改善と成長・連携と協働の実現）に合わせた広報編集委員会の取り組みとしては

- (1) 社会福祉士会の研修会・委員会・地区活動の取り組みや、社会福祉士の活動を会員含め、多くの方に知っていただき、社会福祉士の職能について認知度の向上や一般化を図ります。
- (2) さまざまな分野での社会福祉士の活動や、特色ある福祉活動の紹介について広報活動してまいります。あわせて会員が自分とは異なる分野での福祉活動などを知ったり、自身の分野での取り組みの広がりや連携について考えたりできる機会につなげます。
- (3) 社会福祉士会の活動や地区活動などについて周知する中で、社会福祉士会への参加や、地区活動への参加促進を高めるために、会員からの寄稿など、会員参加の広報紙を発行していきます。

上記のような取り組みを行いながら、会員が求める広報紙のあり方、またホームページや一斉送信メールなどについて研究していきます。

4. 長野県社会福祉士会、委員会のあるべき姿について

私が入社2年目に入る頃、広報編集委員にお声をかけていただきました。経験年数が短いことから、はじめはお断りしました。しかし、職場のある方から「社会福祉士は横のつながりを作らなきゃいけないよ。」という一言に一念発起し、委員になりました。話すことで社会福祉士として大切にしていることを再認識でき、取材を通していろんな方と出会えたことは私の強みとなりました。今後は先輩方からの教を後輩に伝えていこうと思っております。入会はしているけれど、会への参加が難しい時には、広報紙やホームページをぜひご活用ください。多くの会員が参加でき、身近に社会福祉士を感じられ、会員相互の顔の見える広報紙として創意工夫し、情報発信できる委員会にしていきたいです。



北信地区

氏名：金井 佑 樹
所属：長野市社会事業協会
入会年度：平成25年度



●趣味・最近ハマっているもの

『スーパー銭湯（サウナ）』

週1回、近所にあるスーパー銭湯へ行き、温泉+サウナ（5セット）で心身のリフレッシュをしています。サウナも友人に誘われて行き始めましたが、今では友人よりもハマっています。サウナ後の水風呂が至福のひとつです。

●コロナ禍で感じていること

『コロナ禍の状況へ慣れてしまうことへの怖さ』

コロナウイルスが騒がれ始めた当初は、いつ自分の周りに感染者が出てしまうのかと右往左往しており、感染症対策にも余念がありませんでした。しかし、拡大している現在はその状況にも慣れてしまい、コロナに対して油断してしまっている状況です。そういった慣れが一番怖いので、気を引き締めたいと思っています。

●職種・業務内容

障がい者相談支援専門員

利用者様やご家族の状況や環境、希望をアセスメントし、日常生活を営むために必要な障がい福祉サービス等を、適切に安心して利用できるよう、サービス提供事業者等への紹介、連絡調整、ケアプランの作成を行なっています。

●社会福祉士として心掛けていること

初めてサービスを検討される方は、日常生活に他者が入り込み生活が変化することへの不安を感じる方も少なくありません。プライベートな側面に寄り添うことが多い仕事ですので、支援の押し付けにならないよう適切な距離感を図りながら徐々に関わりを深め、その時々のお悩みやニーズを引き出せるよう努めています。

●年男・年女としての1年の抱負

来年は新たなことへのチャレンジをし、今まで気付かなかった自分を発見したいと思っています。まずは、現在障がい者分野を中心に仕事面でも関わっていますが、自分の見識を広げるため、あまり関わりのなかった高齢者分野の勉強をして、介護支援専門員の資格を取得しようと思っています。

東信地区

氏名：宮田 香 織
所属：鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院
入会年度：平成24年度



●趣味・最近ハマっているもの

ステイホーム期間に始めた季節ごとの保存食作りにはまっています。

信州人の特権かもしれませんが、季節毎に野菜や果物を大量にいただくので無駄にしないように保存食にするように工夫しています。果実酒やコンポート、ジャムなど手間をかけた分、美味しくできた時は嬉しいものです。レモンを輪切りにして氷砂糖に漬けたレモンシロップは料理からデザートまで汎用性が高く我が家の常備食になりました。

●コロナ禍で感じていること

ストレスコントロールが大切だと感じています。ただでさえ毎年、冬場は特に医療現場は毎日神経を尖らせてウイルスと戦っています。心身の健康を保つためにも、小さな幸せに目を向け、笑顔を忘れずしなやかに過ごせる努力が必要だと感じています。

●職種・業務内容

医療ソーシャルワーカーをしています。入院患者さん、ご家族の相談業務、退院支援、制度紹介を主な業務として行っています。

●社会福祉士として心掛けていること

宮田の顔を見るとほっとする、話したくなる、また宮田に相談したいと思ってもらえるような相談員を目指しています。

●年男・年女としての1年の抱負

丑年は「我慢（耐える）」や「発展の前振れ（芽が出る）」を表す年になると言われています。私は本厄なので、病気、怪我、トラブルに気をつけて慎ましく1年を過ごし、仕事も家庭も実りある1年になるように努力したいと思っています。

感染状況がまだまだ心配な中で、新年を迎えました。福祉業界においても、感染対策には試行錯誤の日々だったのではないのでしょうか。年男・年女の会員の皆さんに、コロナ禍で感じていることや1年の抱負についてお聞きました。

中信地区

氏名：森 あかね
所属：ニチイケアセンター
松本桐
入会年度：平成7年度



●趣味・最近ハマっているもの

『ラジオを聴く』

朝の通勤の車内でつけたラジオが面白くてハマりました。今は聞き逃しサービスなんて便利なものがあるんですね。夕方になるとイヤホンをつけて楽しんでいきます。

●コロナ禍で感じていること

『見えない日々』

マスク・手洗い・うがいは日常化しているけれど、ちっとも予防できている気がしません。すでに自分が感染者かも知れないし、半年後・1年後に状況が良くなっている想像ができません。

●職種・業務内容

居宅介護支援事業所の介護支援専門員です。利用者さんとパソコンに向き合う日々です。コロナ禍で多職種連携のような会議や研修が減っていて、仕事が閉じている感じでちょっと息苦しい…。

●社会福祉士として心掛けていること

仕事の対象となる高齢者の方やそのご家族に対して、いつでも相談をしやすい雰囲気になりたいと思っています。が、未だに難しいですね。心配ごとや不安が表情に出てしまったり、こちらが話しすぎてしまったり。「専門知識」は前提ではあるけれど、元々の性分は変えられない、つくづく思います。

●年男・年女としての1年の抱負

いまさらですが、仕事でもプライベートでも「なりたい自分」になりたいかな。丁寧な生活、朗らかな会話、さくさく進む仕事。音楽を聴いて運動もする。……あ、コロナが。これがあるから、ついマイナス思考になってしまう。今まで以上に元気で仕事ができることを感謝して過ごします！

南信地区

氏名：関 清佳
所属：社会福祉法人
諏訪福祉会
入会年度：平成8年度



●趣味・最近ハマっているもの

『ランニング』

4年前、諏訪湖マラソンの応援に行き、走ってみたい！と思ったのがきっかけ。走り始めはキツくても、走り終えた時の気持ちよさは癖になります?! 週末走るくらいですが、毎年大会出場が目標です。職場に仲間がいるので切磋琢磨できて楽しく続いています。

●コロナ禍で感じていること

『感染予防対策』

マスクだけでなくフェイスシールド等の着用…人の顔がよくわかりません。県外の往来による行動制限…大事な家族とも会いにくく、気軽に遊びにも行けません。さまざまなことに気を遣います。子どもたちの将来にどう影響するか心配です。先々が不安。元の生活に戻るといいな…

●職種・業務内容

居宅介護支援事業所の介護支援専門員と、行政から委託された在宅介護支援センター事業の担当を兼務しています。さまざまな関係機関の方、地域の方々と関わらせていただいています。人を支援していくには、他職種連携が欠かせないと日々感じます。

●社会福祉士として心掛けていること

「その方と話す。よく知る。」ことに心がけています。支援方法に迷うことがよくあります。関係機関やご家族、周りからの情報も大切ですが、何より当人の話、話をする時の表情や様子はいろんなことを気づかせてくれます。そして、過去があるから今がある。その方の強みを引き出し、活かした支援をしていきたいと思っています。

●年男・年女としての1年の抱負

記事を依頼されて、改めて年齢を考えてしまいました。自分の年にビックリ…?! 「始めるのに遅すぎることはない！」といつも自分に言っています。年女として、ではありませんが、プライベートでも仕事でもチャレンジしたいことがあれば積極的に取り組みたいと思います。が、その前に日々のノルマをこなしていないといけませんね…。

「ケアワーク」

横谷 貴大 (御代田町社会福祉協議会 宅老所きくちゃん家)

入社して数日後、事業所の管理者から「認知症の人と見るのではなく、この人の性格の中に認知症があると見なさい」と教えていただきました。この時、恩師である端田篤人先生から教わった言葉を思い出しました。

それは「ケアワークがあってこそそのソーシャルワーク」です。

この言葉は、私たち長野大学生が、昨年長野市や上田市を襲った台風19号での災害ボランティアを通して、感じたことを端田先生が言葉にさせていただいたものでした。住民の皆さんと一緒に泥かきや家具の運び出しをすることで、信頼関係が生まれる。そして、さまざまな困りごとを教えていただき、ニーズにつなげることができる。この過程が大事だと感じました。

この過程は、ケアワークの中でも大切だと学生の時は感じていました。

ですが、介護技術や知識が乏しい新人の私は、介護技術や日々の支援の流れを覚えることで、うまく信頼関係を構築できていなかったと感じています。

今一度、「利用者様とお話すること」「何か作品を一緒に作ること」ができる時間を作れるようになりたいと感じます。また、先生に教えていただいた言葉を私の社会福祉士としての価値として大切に、支援をしていきたいです。

*次号は、坂城町社会福祉協議会 塩澤 美咲さんにバトンタッチします。



「信州ぐるっと!! 特色ある福祉活動を紹介」

佐久地区ボランティア・地域活動フォーラムのご紹介

神津 直也 (社会福祉法人 小諸市社会福祉協議会)



先日行われた佐久地区ボランティア・地域活動フォーラムを紹介します。

例年は佐久地区の地域住民や社会福祉協議会（以下、社協）職員等が参加していますが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため社協職員のみ限定しました。

前半は昨年の台風19号災害を振り返り、災害ボランティアセンターを設置した市町職員から報告を受け、台風19号から1年が経過した今、改めて考える機会となりました。後半はコロナ禍のボランティア

活動及び地域活動として、コロナ禍であっても活動を継続している団体の方々からお話を伺いました。

災害や感染症によって私たちの普段の暮らしは一変してしまいます。しかし、私たちはそこから立ち上がり、前に進んでいく力も持っています。人と人がつながることが難しい現在でも、新しい形も模索しながら、私たちは地域の方々と一緒に考えていきます。

今後の予定

最新の予定は、本会ホームページ (<https://nacsw.jp>) をご覧ください。

日時(曜日)	事業名・研修名	会場等	備考
1月15日(金)	累犯障がい者・高齢者支援セミナー	オンライン開催	講師：松本俊彦氏
2月7日(日)	各地区総会	オンライン(一部集合)	
2月7日(日)	新型コロナウイルス時代の地域ケアを考えるセミナー	オンライン(一部集合)	講師：市川一宏氏

◎ 入会状況 (2020年10月末現在) * 会員数：1,179人 入会率：27.23% 人口10万人あたりの会員数：57.54人

編集後記

昨年は新型コロナウイルス感染症により、新しい生活様式を余儀なくされた1年でした。「距離を空けて…」といわれている昨今ですが、社会福祉士はご利用者のために、心は“距離を空ける”ことができない専門家であると、改めて考えています(現在、福祉の職業から離れているため、強く感じています)。

今年は丑年。皆様にとって、幸せが「ギユウ(牛)」と詰まった年であると良いですね。

(M.F)